一人百首絶句集

帝室博物館図書之印

一人百首絶句集

阿波　吉成白鷺　著

對南岡本先生評

世人避暑。或入山林。或游海邊。余乙在城市喧囂之中。獨坐含翠樓。友詩書以消長夏。頃者擬百人一首歌意。吟一人百首。以寄同好士。

天智天皇

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ
わが衣手はつゆにぬれつゝ

秋田卜得稻雲豐。疾苦晨昏績不空。疎屋荒涼明月影。露霑衣袂玉玲瓏。

持統天皇

春すぎて夏きにけらし白妙の
ころもほすてふあまのかく山

落花啼鳥寂無蹤。春去夏來山改容。風物變遷眞似夢。
更衣成計綠陰濃。

柿本人丸

足引の山鳥の尾のしだりをの
なが〳〵し夜を獨かもねむ

秋多愁緒氣難降。明月依依空照窓。長夜夢醒人未到。
寒閨影冷小銀釭。

山邊赤人

田子の浦に打ち出てゝ見れば白妙の
ふじの高根に雪はふりつゝ

風光此地可題詩。砂白松青一段奇。畫趣更添田子浦。

芙蓉嶽雪映波時。

猿丸太夫

おく山に紅葉ふみわけなく鹿の
聲きく時ぞ秋はかなしき

蕭條秋色思依依。況復山中過客稀。鳴鹿呦呦何處所。
白雲黃葉鎖柴扉。

中納言家持

かさゝぎの渡せる橋におく霜の
白きを見れば夜ぞふけにける

玉漏沈沈夢覺初。寒威逼戶感何如。滿階霜色稜稜白。
宮苑夜深人語虛。

安倍仲麻呂

あまの原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

金波萬頃點塵無風色雖同感自殊猶憶故山三笠月一輪皎皎捧氷壺

喜撰法師

わが庵は都のたつみしかぞすむ
世をうぢ山と人はいふなり

紅塵不到愛幽栖宇治山深鳥自啼空恨俗人難了得榮枯憂樂我何迷

小野小町

花の色はうつりにけりないたづらに
わが身よにふるながめせしまに

花開花落不勝懷倏忽春光期易乖窈窕誰能眞可久空憐薄命老生涯

蟬丸

これやこの行くもかへるも別れては
知るも知らぬも逢坂の關

松杉老欝碧山隈京洛關門一路開知與不知多少客東西相別又相來

參議篁

わだの原八十島かけてこぎ出でぬと
人にはつけよあまの釣舟

清廉持己是天眞違勅竟成流謫身欲託漁舟傳七字孤帆無恙發雲津

僧正遍照

あまつ風雲の通路ふきとぢよ
少女のすがたしばしとどめむ

天女降臨三島雲。嬌姿宛轉舞紅裙。春風暫鎖仙宮路。
願駐人間共一醺。

陽成院

つくばねの峯より落るみなの河
戀ぞつもりて淵となりぬる

筑波山上一泉源。流作深淵瀉海門。猶似少年相思切。
深愁夜夜欲消魂。

河原左大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへに
みだれそめにし我ならなくに

懐君夙夜幾辛酸。心緒只期無兩端。空恨薄情猶未覺。
月明簾下倚欄干。

光孝天皇

君がためはるの野に出でわかなつむ
わが衣手に雪はふりつゝ

摘菜東郊往復還。春寒飛雪點衣斑。聊貽微物君休笑。
知已深情在此間。

中納言行平

たちわかれいなばの山の峰に生る
まつとし聞かばいまかへり來む

因州此去路三千。欲別雲山萬感牽。何恨歸來甚容易。
陸乘飛馬水輕船。

在原業平朝臣

千早振神代も知らず龍田川
からくれなゐに水くくるとは

碧流成錦影搖搖。風起白波紅葉飄。振古未聞如此景。

龍田秋色絶塵囂。

藤原敏行朝臣

住の江のきしによる波よるさへや
ゆめのかよひぢ人めよくらむ

欲夢佳人温舊交。此身猶恐世途嘲。心情容易難傳得。
空使苦辛歸水泡。

伊勢

難波潟みじかきあしのふしのまも
あはで此よを過してよとや

夢寢懷郎夜夜勞。君猶不見氣徒豪。淚痕無盡腸將斷。
何日除來此鬱陶。

元良親王

わびぬれば今はた同じ難波なる
みをつくしても逢はんとぞ思ふ

自佳人一送秋波。寤寐難忘焦慮多。如得相逢無惜命。
昔花易老奈春何。

素性法師

今こむといひしばかりに長月の
ありあけの月をまちいづるかな

夜靜秋風透碧紗。孤燈影冷不成花。空傳書信無人到。
唯見一痕殘月斜。

文屋康秀

吹からに秋の草木のしほるれば
むべ山風をあらしといふらむ

誰憐草木易凋霜。況復西風奈惋傷。昨夜無情聲漸瀝。
定知窓外減秋光。

大江千里

月見れば千々にものこそ悲しけれ
わが身一つの秋にはあらねど

月色露光分外清。吟蟲切切又關情。秋風此夕誰無感。聞到愁人別有聲。

菅家

此度はぬさもとりあへず手向山
もみぢのにしき神のまに〳〵

白雲流水古祠庭。鼓響笙聲傾耳聽。楓葉霜餘錦成幣。捧來聊欲慰神靈。

三條右大臣

名にしおはゞ逢坂山のさねかづら
ひとに知られてくるよしもがな

雖寄心情曾未覺。堪看纏繞古松藤。來遊何必憂人識。空對孤窓夜雨燈。

貞信公

小倉山みねのもみぢばこゝろあらば
いま一度の御幸またなむ

小倉秋色染清霜。織出山山錦繡妝。紅葉白雲猶未老。應迎鳳輦仰恩光。

中納言兼輔

みかの原わきてながるゝ泉川
いづみきとてか戀しかるらむ

人生畢竟有浮沈。此恨由來無處尋。何時解得戀情切。自比泉川百尺深。

源宗平朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける
ひと目も草もかれぬと思へば

山村無客叩雲庵。日夕蕭疎對古龕。秋菊已枯楓葉散。
前溪冷雨鎖烟嵐。

凡河内躬恒

心あてに折らはや折らむ初霜の
おきまどはさる白菊のはな

晩香清處曉寒添。籬菊蕭蕭映翠簾。欲折一枝看不辨。
秋霜曉色白于鹽。

壬生忠峯

ありあけのつれなく見へし別れより
暁ばかりうきものはなし

佳人猶未解酸鹹。送別無情我濕衫。殘月一痕天欲曙。
清光只恨照愁緘。

坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに
よし野の里にふれる白雪

晩來風漸漸。寒氣逼禪牀。芳野山頭雪。尚疑殘月光。

春道列樹

山河に風のかけたるしがらみは
ながれもあへぬ紅葉なりけり

染成滿山錦。吹拂夜來風。落葉自成柵。溪流欲不通。

紀友則

久方のひかりのどけき春の日に
しづ心なく花のちるらむ

遲日韶光麗。吟情自覺寛。滿園花灼灼。風雨奈傷殘。

藤原興風

誰をかも知る人にせむ高砂の
松もむかしの友ならなくに

歳歳稀知己。幽懷轉寂寥。松存千古色。相對奈無聊。

紀貫之

人はいざこゝろもしらずふる里は
はなぞ昔の香ににほひける

久闊尋來處。由來多薄情。梅花香郁郁。如舊笑相迎。

清原深養父

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを
くものいづこに月やどるらむ

求涼猶未寐。忽見曉光生。不識浮雲裏。何邊宿月明。

文屋朝康

白露に風の吹しく秋の野は
つらぬきとめぬ玉ぞちりける

一望涼天曉。秋深冷露叢。風來如散玉。野色白玲瓏。

右近

忘らるゝ身をばおもはず誓ひてし
ひとの命のをしくもあるかな

誓約何堪破。秋風萬緒紛。妾心猶可忍。夢寐惜郎君。

參議等

淺芽生の小野のしのはらしのぶれど
あまりてなどか人のこひしき

默默雖相忍。無端聲色知。我心終不解。一笑耻情癡。

平兼盛

しのぶれど色に出にけりわが戀は

物や思ふと人の問ふまで

情緒眞千萬。秘來辛苦多。初知人問我。憂鬱果如何。

壬生忠見

こひすてふ我名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひそめしが

情事眞難秘。流傳疾似風。古今同一轍。渾在苦愁中。

清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつゝ
すえの松山波こさじとは

怒濤曾不越。相契末松山。何料纔旬日。無情已等閒。

中納言敦忠

逢見ての後のこゝろにくらぶれば
むかしは物をおもはざりけり

不逢多別恨。逢復奈離愁。離別終難免。人生共白頭。

中納言朝忠

あふことのたえてしなくば中々に
人をも身をもうらみざらまし

空結千秋恨。交歡纔一宵。始知心事苦。欲語悔偏饒。

謙德公

あはれとも云ふへき人は思ほへで
身のいたづらになりぬべきかな

佳人無好意。傷心亂似絲。今日身雖死。憐吾更有誰。

曾根好忠

由良のとをわたる舟人揖をたえ
ゆくえも知らぬ戀のみちかな

不解胸中結。無情斷宿緣。孤舟如失揖。漂着果何邊。

惠慶法師

八重葎しげれる宿の淋しきに
　ひとこそ見へね秋は來にけり

人間衰與盛。天道本無心。主去家頽敗。秋來草露深。

源　重之

風をいたみ岩うつなみの已のみ
　くだけてものを思ふころかな

波激奇巖處。碎成珠玉飛。美人心不碎。教我思依依。

大中臣能宣

御かきもり衛士のたく火の夜はもえて
　ひるは消えつゝ物をこそおもへ

晝爲消魂苦。夜依情火焦。家人通信絶。鄉國水雲遙。

藤原義孝

君が爲惜からざりし命さへ
　ながくもがなと思ひけるかな

情深相遇後。只願共平安。幸悔前非處。如今一死難。

藤原實方朝臣

かくとだにえやはいぶきのさしもぐさ
　さしもしらじなもゆるおもひを

欲語意中難得期。空收胸底寸心馳。佳人悟解知何日。只恨交情貫徹遲。

藤原道信朝臣

明ぬればくるゝ物とは知りながら
　猶うらめしき朝ぼらけかな

曉光倏忽又黃昏。近世人情手一翻。雖解由來離合事。別愁無恨奈消魂。

右大將道綱母

嘆きつゝひとり寢るよの明くる間は
いかに久しきものとかは知る

獨守空閨燭影微。愁眠不就待郎歸。迎來初識妾心拙。寧若通宵開竹扉。

儀同三司母

わすれじの行末まではかたければ
今日を限りのいのちともがな

畢竟人心易轉移。由來誓約不多時。交情此夜寧雖死。猶勝終生恨別離。

大納言公任

瀧の音はたえて久しくなりぬれど
名こそ流れて猶きこえけれ

何處流泉聞疾雷。林庭水涸付青苔。古宮不見鸞輿過。勝概空傳遺跡來。

和泉式部

あらざらむ此世の外の思ひ出に
今一たびの逢ふこともがな

命過危微旦夕中。無情欄外落花風。黃泉道遠重難會。何處招郎語寸衷。

紫式部

巡りあひて見しやそれともわかぬまに
雲がくれにし夜半の月かな

明月漏光氷鏡姿。浮雲忽掩霽來遲。舊知相遇還如此。纔叙平安又別離。

大貳三位

有馬山いなのさゝ原風吹けば
いでそよ人を忘れやはする

離群寂寞隔華堂。妾慕郎君獨斷腸。却怪秋風無雁信、
容姿早已失恩光。

赤染衛門

やすらはてねなまじものをさよふけて
傾ぶくまでの月を見しかな

今宵爲有約來遊。半捲珠簾倚畫樓。月落西山郎未到。
滿身風露不堪秋。

小式部内侍

大江山生野の路の遠ければ
まだふみもみず天の橋立

大江山在白雲中。不識何時家信通。世上疑心難解得。

吟魂一夜恨無窮。

伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻
けふ九重にほひぬるかな

空憶昔時寧樂都。寂寥無迹自荒蕪。八重花發九重殿。
猶散清芳櫻一株。

清少納言

夜をこめて鳥のそらねをはかるとも
世に逢坂の關はゆるさじ

雞鳴函谷出關門。此事由來一笑言。容易難排胸裏鎖。
寸心徒隔幾晨昏。

左京太夫道雅

今は唯思ひたえなむとばかりを

人づてならでいふよしもがな

萬條心緒亂如絲。何日慇懃述所思。顧得相逢交一語。
紛紛輕薄不窮追。

權中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川ぎりたえ〳〵に
あらはれ渡るぜゝの網代木

秋天漠漠望茫茫。宇治名存水一鄉。映出朝曦消宿霧。
分明認得幾漁場。

相模

恨みわびほさぬ袖だにあるものを
こひにくちなむ名こそ惜しけれ

空悲薄命恨無情。淚濕衣襟夜幾更。心緒不通魂欲斷。
一朝何事買浮名。

大僧正行尊

もうともにあはれと思へ山櫻
花より外に知る人もなし

幽棲何處訪春榮。纔對芳花慰鬱情。寂寂山中知已少。
相憐溪上一株櫻。

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕に
かひなく立たむ名こそ惜しけれ

宮媛月夜惱春情。簾下抱肱人影横。好結良緣纔一刻。
千秋難雪奈浮名。

三條院

心にもあらでうき世にながらへば
こひしかるべき夜半の月かな

清光偏照玉階明。浮世艱難萬感生。他日閑迎栖處月。
應懷今夜不堪情。

能因法師

あらし吹く三室の山の紅葉は
立田の川のにしきなりけり

紅葉深成三室秋。晩風吹散又難留。龍田川上如敷錦。
水映斜陽燦爛流。

良暹法師

さびしさに宿を立ち出てながむれば
いづくも同し秋のゆくれ

孤魂秋夕更難堪。起伴吟筇出草庵。滿目風光同一色。
寂寥江北又江南。

大納言經信

夕されば門田の稲葉音づれて
あしのまろやに秋風ぞふく

稲熟柴門外。殘炎漸欲空。晩來茅屋裡。蕭颯已秋風。

右子内親王家紀伊

音にきくたかしの濱のあだ波は
かけしや袖のぬれもこそすれ

傳聞輕薄子。反覆似秋空。一結交情處。悲傷竟不窮。

權中納言匡房

高砂の尾上の櫻さきにけり
とやまの霞たゝずもあらなむ

嶺上櫻千樹。花開春色濃。彩霞憐我意。勿漫掩前峰。

源俊頼朝臣

うかりける人を泊瀬の山おろし

はげしかれとは祈らぬものを
祈神何所願一片艶情濃却怪郎君意秋風轉戚容

藤原基俊

ちぎりおきしさせもが露を命にて
あはれことしの秋もいぬめり

千金若一諾未果氣難降搖落秋還暮蕭蕭打夜窓

法性寺入道前關白太政大臣

わだの原こぎ出て見れば久方の
雲井にまがふ沖つしら波

萬頃波濤靜扁舟四顧時水天髣髴碧風景更無涯

崇德院

瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川の
われても末に逢はむとぞおもふ

呑淚雖相別笑逢須有時請看青澗水分合結緣奇

源兼昌

淡路島かよふ千鳥の鳴く聲に
いく夜ねざめぬ須磨のせき守

烏容須磨浦水禽驚夢飛當知守關者夜夜睡眠稀

左京太夫顯輔

秋風にたなびく雲の絶間より
もれ出る月の影のさやけさ

雲烏秋風破詩歌興欽飛一輪明月漏簾外更清輝

待賢門院堀河

ながからむ心も知らず黑髮の
亂れてけさは物をこそ思へ

與郎成誓約偕老竟何如亂髮猶堪理愁心豈可梳

後德大寺左大臣

杜鵑なきつる方をながむれば
唯ありあけの月ぞ殘れる

深夜驚愁夢。茫然笑我迂。一聲鵑不見。天上月輪孤。

道隱法師

思ひわびさても命のあるものを
うきにたへぬは涙なりけり

孤枕多愁苦。病身鶴樣癯。我懷忘不得。雙淚落如珠。

皇后太夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひ入る
やまの奥にも鹿ぞなくなる

去入山林境。方期與世麤。鹿鳴猶破夢。枕上轉長吁。

藤原清輔朝臣

ながらへばまた此頃やしのばれむ
うしと見し世ぞ今はこひしき

今日孤愁恨。他時心境殊。誰知浮世事。窮達有榮枯。

俊惠法師

夜もすがら物思ふころは明けやらで
ねやのひまさへつれなかりけり

不睡寒燈下。懷君夢轉迷。枕頭天未曙。殘月照空閨。

西行法師

なげゝとて月やは物をおもはする
かこち顔なる我涙かな

明月無私照。愁人獨感懷。淚痕空點點。深鎖半扉柴。

寂蓮法師

村雨の露もまだひぬ槙の葉に

きりたちのぼる秋の夕ぐれ

雨洗松杉去。蒼然露滴階。冷風秋霧霽。山色暮光佳。

皇嘉門院別當

難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ
みをつくしてや戀わたるべき

爲消孤客恨。一夜酒間陪。戀戀情難盡。空羞白髮催。

式子内親王

玉の緒よたえなばたえねながらへば
しのぶることのよわりもぞする

誰知吾恨事。寧厭此身摧。却恐長生後。空招恥辱來。

殷富門院大輔

みせばやな雄島のあまの袖だにも
ぬれにぞぬれし色はかわらじ

此淚何時盡。痕霑衣袂頻。點來雖到血。難寄意中人。

後京極攝政前大政大臣

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに
衣かたしき獨かもねむ

蟋蟀鳴階下。夜深寒逼身。敝衣孤枕冷。何復恨清貧。

二條院讃岐

我袖は塩干に見えぬ沖の石の
人こそ知うね乾くまもなし

淚如秋雨下。點滴不堪聞。快霽知何日。枕頭愁緒紛。

鎌倉右大臣

世の中は常にもがもな渚こぐ
あまの小舟のつなでかなしも

漁舟過柳渚。欸乃夕陽村。顧占風光美。長離市井喧。

參議雅經

みよし野の山の秋風さよふけて
ふるさと寒く衣擣つなり

夜深人未寢明月露華闌更有砧聲急秋風颯颯寒

前大僧正慈圓

おほけなくうき世の民におほふかな
我たつ杣に墨そめの袖

深山容膝處默禱萬民安愧我無才德傷心坐夜闌

入道前太政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならで
ふり行くものは我身なりけり

風急庭花落紛紛雪滿欄何知吾鬢髮斑白不堪看

權中納言定家

來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに
やくやもしほも身もこがれつゝ

水落松帆浦煙迷晚照殘柴門人未到惆悵寸心酸

從二位家隆

風そよくならの小川の夕暮は
みそぎぞ夏のしるしなりける

清風時颯颯涼氣逼闌干爲有修河稧未秋知暑殘

後鳥羽院

人もをしあはれもゆゑに物思ふ身は
世をいとふ人も怨めしあぢきなく

倭者多輕薄賢人去不還世途多恨事何日洗愁顏

順德院

もゝしきや古きのきばのしのぶにも

なほあまりあるむかしなりけり

故宮春寂寞。雜草敗檻間。空憶前朝盛。背人暗淚斑。

以漢詩譯和歌。極爲難能。況百首之多乎。蓋詩歌異字。體亦不同。微言妙詞。各有長處。相譯則其味索然。此編以老練之筆。融化出之。不陷弊竇。頗得其神。吾兄老來詩境益進。筆力加健。前既有百梅詩。今又見此篇。其才之富瞻。筆之捷給。不多見其類。若更加推敲。費練磨之功。則必有詩名著於世者矣。僕不獨於此篇言也

甲戌歲晚　對南由安　批

76230

跡見学園短期大学図書

（德島市寺島本町・一成社印刷）